

平成28年度 事業報告

I. 法人の概況

1. 設立年月日 昭和23年5月24日

(公益財団法人移行設立 平成25年4月1日)

2. 所管官庁

茨城県農林水産部農業経営課

3. 定款に定める事業内容

(1) 鯉淵学園農業栄養専門学校の経営に関する事業

(2) 農業及び食品に関する試験・調査研究並びに農業者及び消費者に関する調査研究の事業

(3) 農業及び食品に関する各種講習会、研修会の事業

(4) 農業体験及び農産物の加工・調理体験に関する事業

(5) 農産物等の販売及びレストラン等の運営に関する事業

(6) 不動産の賃貸に関する事業

(7) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

4. 主たる事業所

事務局:茨城県水戸市鯉淵町5965

鯉淵学園農業栄養専門学校:茨城県水戸市鯉淵町5965

5. 職員 (平成29年3月31日現在)

区分	職員	嘱託	備人	計	備考
事務局	名	名	名	名	
鯉淵学園	28	12	5	45	学園長・相談役を除く
計	28	13	5	46	

(注) 平成28年度採用 2名 (新規採用)

平成28年度退職 5名 (定年退職・再雇用3名、中途退職2名)

II. 評議員会及び理事会等

1. 評議員会の開催

(1) 平成28年度定時評議員会

1. 日時 平成28年6月22日(水) 10:30~12:30

2. 場所 東京都中央区京橋1-7-1 TKPカンファレンスセンター会議室

3. 出席者 評議員 9名

4. 議案

<決議事項>

第1号議案 平成27年度決算書（貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録）の承認の件

(2) 平成28年度臨時評議員会

1. 日時 平成29年3月22日（水） 10:30～12:15

2. 場所 東京都中央区京橋1-7-1 TKPカンファレンスセンター会議室

3. 出席者 評議員 7名

4. 議案

<決議事項>

第1号議案 平成29年度事業計画及び収支予算書の承認の件

<協議事項>

(1) 評議員、理事及び監事の改選対応について

2. 理事会の開催

(1) 平成28年度第1回理事会

1. 日時 平成28年4月15日（金） 15:00～15:15

2. 場所 鯉淵学園農業栄養専門学校 会議室

3. 出席者 理事8名、監事2名

4. 議案

<協議事項>

第1号議案 特定資産の一般資産への振替に関する件

(2) 平成28年度第2回理事会

1. 日時 平成28年6月2日（水） 10:00～12:05

2. 場所 鯉淵学園農業栄養専門学校 会議室

3. 出席者 理事8名、監事2名

4. 議案

<決議・承認事項>

第1号議案 平成27年度事業報告及び附属明細書の承認の件（承認事項）

第2号議案 平成27年度決算書（貸借対照表、正味財産増減計算書、附属明細書及び財産目録）の承認の件（承認事項）

第3号議案 特定資産取扱規程の制定の件（決議事項）

第4号議案 平成28年度定時評議員会の開催の件（決議事項）

(3) 平成28年度第3回理事会

1. 日時 平成28年11月29日（火） 14:30～16:30

2. 場所 鯉淵学園農業栄養専門学校 会議室

3. 出席者 理事7名、監事1名

4. 議 案

<決議事項>

- 第1号議案 借入金限度額の設定の件
- 第2号議案 専門職大学の研究開始の件

(4) 平成28年度第4回理事会

- 1. 日 時 平成29年1月26日(木) 11:30~13:00
- 2. 場 所 鯉淵学園農業栄養専門学校 会議室
- 3. 出席者 理事7名、監事2名
- 4. 議 案

<協議事項>

- 第1号議案 平成29年度事業計画及び予算の件

(5) 平成28年度第5回理事会

- 1. 日 時 平成29年3月1日(水) 10:00~12:25
- 2. 場 所 東京都千代田区有楽町1-9-3糖業会館 会議室
- 3. 出席者 理事9名、監事1名
- 4. 議 案

<決議事項>

- 第1号議案 諸規程の改正の件
- 第2号議案 平成29年度事業計画及び収支予算書の承認の件
- 第3号議案 臨時評議員会の開催の件

3. 役員経営検討会の開催

- 第1回検討会 平成28年4月15日(金)
- 第2回検討会 平成28年6月2日(木)
- 第3回検討会 平成28年7月28日(木)
- 第4回検討会 平成28年10月27日(木)
- 第5回検討会 平成28年11月29日(火)
- 第6回検討会 平成29年1月26日(木)

Ⅲ 公益事業

—鯉淵学園農業栄養専門学校の経営—

1. 教育の概況

次の方針に基づき正規の教科課程の外に調査・試験研究などを行い教育の充実に取り組んだ。(添付資料1「平成28年度行事实施表」を参照)

(1) 教育方針

鯉淵学園農業栄養専門学校(以下「鯉淵学園」という。)は、広く日本全国から入

学する学生を対象として、農業を担う実践者（経営者・技術者）と指導者、健康的な食生活の改善発展を担う人材、実践力のある地域リーダー等を養成するために、以下の教育方針をもって臨んだ。

- 1) 農業と食生活の発展・改善に寄与できる総合的能力の育成
- 2) 循環型社会の実現と国民の健康増進及び食文化の発展に寄与するための食農一貫教育
- 3) 基礎理論の理解のもとに、先端技術を含む専門的知識及び現場での実践力と応用力を重視した教育
- 4) 学生生活全般を通じて人格の形成をめざし、他者との協力により社会の発展に貢献しようとする意志と能力の育成

こうした教育方針に基づき、以下の諸点に重点をおいて教育を行った。

- ①農畜産及び食と栄養に関する学生教育を行った。
- ②外部機関との連携を強め、新規就農の促進を行った。
- ③農林行政機関、試験研究機関、関係諸団体などとの連携のもとに、現地派遣実習や視察研修を重視し、農と食の実態把握を通して方向を見出す力を養った。
- ④バイオテクノロジーから環境保全型農業・有機農業、トレーサビリティ、健康と福祉など、社会が求める技術課題に的確に対応した教育を行った。
- ⑤農と食の現場で役立つ各種の資格取得を促進し、きめ細かい進路指導を行った。
- ⑥学生組織の自治を尊重し、学生の協同と自立の精神の涵養に努めた。
- ⑦社会人を対象とした農業技術研修や食品加工研修等、多様な研修事業を展開し、併せて小中学生等対象の農業体験学習を行った。

(2) 教育内容

1) 入学資格

高等学校卒業生又は同等以上の学力があると認められる者であって、健康な食生活、農業、農村の発展とに取り組む意欲のある者。

2) 修業年限 2年

3) 学科別定員及び在学学生数（平成29年3月31日現在（卒業生含む））

区 分	定員	コ ー ス 名	1 学 年	2 学 年	合 計
-----	----	---------	-------	-------	-----

アグリビジネス科	90	作物園芸コース 畜産加工コース 協同組合コース	23	33	56
食品栄養科	40		32	32	64
合 計	130		55	65	120

4) カリキュラムの編成

食料・農業・農村・生活栄養について、それらの実践者と指導的な人材を養成するために必要な専門知識と技術を習得する科目を重視してカリキュラムを編成し、一般教養科目は必要最小限とした。

また、演習、実験、実習、学園外への派遣実習などを重視し、講義と併せた総合的な教育成果を高めるためのカリキュラムとした。

(3) 入学状況

1) アグリビジネス科・食品栄養科

科 別	志願者数	入学者数	備 考
アグリビジネス科	24	21	修了年限2年
食品栄養科	35	33	修了年限2年
計	59	54	

2) アグリビジネス科・食品栄養科 出身校別入学者数

科 別	農業高校	普通高校	その他	計
アグリビジネス科	7	10	4	21
食品栄養科	5	22	6	33
計	12	32	10	54

3) 都道府県別入学者数

都道府県名	アグリビジネス科	食品栄養科	計	都道府県名	アグリビジネス科	食品栄養科	計
青 森	1		1	静 岡	1		1
福 島	1	2	3	愛 知	1		1
茨 城	3	30	33	沖 縄	1		1
栃 木	6	1	7				
埼 玉	1		1				
千 葉	2		2				
東 京	1		1				
神奈川	1		1				
山 梨	1		1				
長 野	1		1	計	21	33	54

(4) 教科課程

科の組織			実習・演習		講義 (時間)	合計 (時間)	外来講師 (人数)	備考
			校内	校外				
専 門 課 程	1 年	<アグリビジネス科>						
		作物・園芸コース	675	0	600	1,275	13	
		畜産・加工コース	450	0	660	1,110		
		協同組合コース	450	0	750	1,200		
	<食品栄養科>	315	0	795	1,110			
	2 年	<アグリビジネス科>					13	
		作物・園芸コース	630	180	465	1,275		
		畜産・加工コース	630	180	570	1,380		
協同組合コース		540	180	600	1,320			
		<食品栄養科>	270	45	585	900		

(5) 主な式典・行事

- | | | | |
|--------|-----|-----------|-----|
| 1) 入学式 | 期 日 | 4月6日 (水) | 体育館 |
| 2) 学園祭 | 期 日 | 11月5日 (土) | 構 内 |
| 3) 農業祭 | 期 日 | 11月1日 (火) | 体育館 |
| 4) 卒業式 | 期 日 | 3月15日 (水) | 体育館 |

5) 卒業状況

①卒業者数 63名

ア. アグリビジネス科・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32名

- | | |
|-------------|-----|
| 1. 作物・園芸コース | 17名 |
| 2. 畜産・加工コース | 9名 |
| 3. 協同組合コース | 6名 |

イ. 食品栄養科・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31名

② 東畑賞 2名

③ 鯉淵学園農業栄養専門学校学園長賞 (3名)

④ 全国農業大学校協議会会長賞 1名

⑤ 一般社団法人全国栄養士養成施設協会会長賞 1名

⑥ 全国栄養士養成専門学校協議会会長賞 1名

⑦ 農業大学校同窓会全国連盟会長賞 1名

2. 学生の関心に対応した教育の実施

(1) 教育内容の明確化

学習範囲や習得目標の明確化をはかり、2年間の学園教育で学生が一定の専門的知識・技能の習得をめざすための教科課程の分類や科目の簡素化・重点化について検討し、平成29年度入学生から対応する。アグリビジネス科はコース構成を見直した。他に実習手帖・農場実習ノートや映像等の教育資材を整備し、農場実習の見える化を推進した。

食品栄養科は、リメディアル教育チームを中心に、パソコンの基本操作や、数学等の特別講座を開講し基礎的学力の修得を目指した。また、入門ゼミを開講し、各教員により、栄養士としての学習に対する心構えなどについて講話し、早期の習得目標の具体化・意識付けを行なった。

(2) 資格取得教育

卒業時に与えられる「専門士」に加え、日本農業技術検定（1級、2級、3級）、農業・商業簿記検定、機械・車両作業免許、毒物劇物取扱責任者、危険物取扱者（乙4類）、家畜人工授精師、家畜体内受精卵移植師、栄養士、食育栄養インストラクタ等の資格取得を指導し、以下のような教育を行った。

アグリビジネス科では、授業内容と資格取得との関連性を重視し、個別教職員による指導対応をおこなうため資格試験対策講座を計画的に開催し、前後期ともに学科内で立案した計画に沿って実施した。農業簿記講座を新規に開講した。資格取得者の管理情報を整備し、学生が農業技術検定、農業・商業簿記検定、機械・車両作業免許等の資格の取得などに挑戦するよう指導支援を徹底した。

平成28年度各種資格取得者（本科生）		
名	称	人数（人）
日本農業技術検定	（2級） 合格者	4
日本農業技術検定	（3級） 合格者	7
家畜人工授精師講習会	修了者	9
家畜体内受精卵移植師（牛）講習会	修了者	6
大型特殊自動車免許		22
大型特殊自動車けん引免許		1
大型フォークリフト技能講習		13
大型車両系運転業務		15
小型車両系運転業務		1
刈払機取扱作業	者	7
危険物取扱者（乙種4類）	合格者	1
農業簿記（3級）	合格者	3
栄養士（卒業認定）		31
食育栄養インストラクター		22

食品栄養科では、資格試験対策講座（前・後期）を開講し、習熟度別クラス編成

での少人数指導を実施した。栄養士実力認定試験、校内模擬試験の結果を分析して次年度の指導方針の検討に活用した。

(3) 就農・就職指導の強化

学生の入学時から就農・就職に対する意識・意欲を喚起し希望進路に進めるよう指導を充実した。

(4) 教育内容の充実のための教員の育成

教職員の学会・外部研修会等への派遣として全国農業大学校協議会が主催する畜産教育研修会、学校運営研究会、平成 28 年度（公社）茨城県栄養士会研究教育・公衆衛生専門研究会・研修会、平成 28 年度茨城栄養学術講習会、（公社）茨城県栄養士会 法人設立 30 周年記念講演会に参加した。さらに研究・教育報告会（毎月 1 回）を開催し、若手教員の能力の向上等に努めた。また、前・後期末に学生による授業評価を実施し、結果は学科会議にて公開し、教務委員会に報告した。各専任教員については、学生からのコメントも報告し、次年度の講義方法の改善に活用するよう要請した。その他、教員が所属する学会への参加を推奨した。

学生・教職員のための海外・国内研修体験や就農支援などの研修支援を行い以下のような支援を行った

学生の支援では、インターンシップ支援として、アグリビジネス科作物園芸コース有機専攻 2 年近藤祥太が宮城県串間市のくしまアオイファームで 4 月 30 日から 5 月 6 日までサツマイモの生産及び海外への販売拡大などについて研修を行った。

もう一つは六次産業教育の体系化と充実強化に向けた教育基材等への支援で畜産教育管理棟学生指導室にブラインドが設置された。

(5) 教室及び実験・実習室の整備

各教室の空調と視聴覚設備、情報処理室の設備について、財政の状況を勘案して計画的な導入・改修に取り組み、2 号教室棟に一部空調設備を導入した。高温時期（6～8 月）には、開講を空調設備がある教室に振り分けて、熱中症対策等を行った。

(6) 教務部門の運営改善

意思疎通・伝達・意志決定の迅速化、業務運営の効率化等を実現するため、教務部門の運営改善について総合的に検討し、逐次具体化に取り組んだ。

(7) 専門課程 アグリビジネス科

1) アグリビジネス科教育の充実・強化

アグリビジネス科では、少人数受講生講座やコース・専攻変更希望者等に対応す

るため専攻のあり方等についての検討を行い、29年度入学生より、現在の3コース4専攻から2コース2専攻へ変更する準備をした。

平成27年度までの、プロジェクト学習では、学生各自がテーマを設定し、それを教員が指導していたが、28年度は教員の専門に基づいたテーマから選択することとした。

とくに畜産・加工コースにおいては、充実した研究をおこなわせるため、従前のように教員が分担するのではなく、教員が研究テーマを複数提示し、学生が研究テーマを醸成・決定するプロセスに時間をかけた。結果的に納得して取り組めるようになった。

2) 見える化に向けた農場実習の見直し

園芸分野における生産・出荷計画とリンクした実習計画の作成は叶わなかったが、農場にて平日毎朝行われたミーティングに、一部教務職員、直売所職員が参加することにより、前年度よりは実習内容の充実化が図れた。

実習手帖を園芸系向けとし、新たに畜産系向けに実習の手引きとして、実習教材の再整備を図った。実習手帖は、前年度同様、茨城県耕種基準をもとにした主要農産物の栽培暦・病害情報などの資料のほか、実習の見える化にむけ栽培技術の習得度自己評価シートを冊子としてまとめたが、学生への周知が十分に行えず活用は、一部の学生にとどまった。また、複数講義における実習手帖の活用を推進した。基礎分野の習熟度別教育の検討は継続して行う。

実習の手引きは、畜産（酪農・肉畜）に関するテキスト形式とし、習得度自己評価シートなどは省いたが、次年度以降、実習の見える化に向け、何らかの形で導入を検討する。

3) 他機関との連携

園芸農場においては、農業生産法人NCS、環境管理センターなどの企業と連携し園芸農場での試験栽培、生産を行うことでさらなる実習機会の拡大を図った。畜産農場においては、農業生産法人みずほ農場と連携した特別実習、管理当番実習を試行し、実習機会の拡大を図った。また、コンピューター総合研究所の「モーショセンサー」の利用による牛の監視システムの共同研究を行った。

4) アグリビジネス科 コース・専攻別対応

① 作物・園芸コース（作物・園芸専攻、有機専攻）

連携企業であるNCSアグリサポートにおける実習実施に向け協議を行った。実際に、実習を依頼する場合、農場実習5部門に1部門が追加されることとなるため、事業効率・教育効果の点から実習部門の見直し（野菜3部門の統廃合、区分けの変更など）、が必要である。

農業教育の体系化や習得目標の明確化のためには、学生の知識・経験不足や

指導力不足などがあるので、基礎的な知識を習得させたのち栽培技術について学ばせるように、講義とのリンクが重要である。

② 協同組合コース

今年度は、協同組合派遣実習の際、本校と協定を締結している J A 水戸等に学生の実習をお願いした。販売事業のみならず、営農指導事業等その他の事業を実習させていただき、学生は総合農協の特性を学んだ。

③ 畜産・加工コース

ア. 畜産実習と外部評価

全国牛削蹄大会は、本学園を会場に有限会社瑞穂農場の協力のもと 11 月に開催された。今年で 7 回目となった。

また、10 月、3 月の茨城県ホルスタイン共進会の出品については常に上位の入賞、11 月の関東大会では、未經産牛の出品ができたが残念ながら課題が残る結果となった。学生の意欲的な参加と、主体的な取り組みが続いた成果が実を結んだ。また、参加校(農業高校)等との関係が密になり、本校に意欲的な学生が入学する結果となった。学生達が牛飼育について自信と誇りを持つことから、これからも積極的につとめたい。

イ. 畜産農場の改革に伴う畜産教育のあり方検討

今年度は、畜産農場の大改革の年であった。有限会社瑞穂農場との「大規模牧草地を含む土地、施設を有効利用した運営方式」として、畜産農場の経営資源を活用した業務提携によって産学協同モデルを構築し、収益改善と畜産事業を担う人材の育成と確保に取り組むことが今年度より始まった。これまでの学園の畜産教育の基本を改めて確認し直し、「新たな学園畜産教育」を模索、検討しながら進めてきたが、幾つかの検討課題も出てきた。これからの日本の畜産の担い手を育成するモデルとなるように模索を続けたい。

ウ. 繁殖分野を中心とした資格取得と担当職員の指導力アップ対策

今年度の家畜人工授精師、体内受精卵移植師の受講者については、全員合格となった。新技術や情報システム活用などへ積極的にチャレンジに努めたい。

(8) 専門課程 食品栄養科

1) 栄養士養成教育の充実

リメディアル教育チームとキャリア教育チームを全教員で編成し、栄養士養成教育における基礎・導入教育と技術教育等の充実を図った。また、平成 29 年度入学生対象の新カリキュラム実施に向けた準備を行った。

① リメディアル教育チーム

基礎的知識・技能の修得と栄養士実力認定試験〔(一社) 全国栄養士養成施設協会実施〕対策を実施した。

② キャリア教育チーム

就職活動指導および調理技術検定をプロジェクト学習において実施した。

ア. 就職活動指導は、1年次には、入学と同時に校外インターンシップ先を紹介し、9名が取り組みを行った。また、「2年生の内定獲得者による就職活動体験報告会(12/1)」を開催し聴講させ、企業研究を行わせた。2年次は、前期から「就職活動状況調査書」を活用し、自己評価と適性、求人内容とのすりあわせを行わせると同時に「模擬面接試験の実施」、「履歴書添削」、「メイク講座」、「校内企業説明会(6社)」、「採用一次試験(5社・校内で実施)」を行い就業意識の醸成を促した。採用試験を受験後、内定を獲得した学生は「就職内定報告書」、未内定の学生は「就職試験受験報告書」の提出を義務づけ、次の就職指導に役立つよう保管した。その結果、進路決定(内定)率は96.8%(30/31名)〔内訳は栄養士93.6%、一般企業3.2%〕に達し、昨年度に引続き進路決定率、栄養士就職率ともに高水準を維持できた。

イ. 調理技術検定は1、2年次の後期に3課題を実施した。これまで、切り物技術と調味、卵の焼き物の技術検定を実施していたが、新たに治療食の調理技術の検定を実施した。いずれも1回の検定で合格した者は少数であり、2、3回の調理技術指導と追試験を行うことで技術の向上がみられた。最終的に卒業時には31名全員合格させることができた。

2) 平成29年度入学生対象の新カリキュラムの準備

平成29年度入学生から対象の新カリキュラム(5科目・150時間・8単位削減)の実施に向けて、変更のある科目についてシラバス等の検討・準備を行った。

(9) 研究科

協定締結JA・市町村での派遣実習は、学生の就職分野に合わず実施できなかったが、農場における専攻実習は学生の意欲も高かったこともあり、前年度以上に充実させることができた。

3. 学生の自主性を尊重した支援活動

教育内容・実績をアピールする対外活動(オープンキャンパス・学校見学会、高校訪問、学園祭など)に積極的に取り組むこととし、学内関連部署との情報交換を密にして効果的な学生募集活動の実施を目指した。また、キャリア教育チームと就職支援部門において就職指導関連情報の共有化など連携強化を進め、学生に対して効果的なサービス

提供体制の構築を目指し、おおむね良好な関係で学生の就職活動状況などを共有できた。オープンキャンパス・学校見学会は、体験学習メニュー・担当者・協力学生について年度当初に立案した計画に沿って実施できた。学園祭に於いても学生自治会の協力も得ながら広報を実施した。

(1) 学生募集活動の強化

平成 29 年度入学生の学生募集活動は、ホームページ運営、SNS 活動、高校訪問などの取り組みにより、入学者数は前年度より 10 名増加し 64 名となったが目標の 80 名からみれば厳しいものになった。

オープンキャンパス 5 回・学校見学会 12 回実施

参加者数 159 名（アグリビジネス科 66 名、食品栄養科 84 名、研修科 9 名）

(2) 学生生活支援活動の充実

学生生活支援サブチーム、組担任会を始め管理グループ総務経理チームおよび学務チームと連携して、学園の環境整備に取り組むとともに、学生が学生生活を良好に過ごせるように指導と支援を行った。

(3) 就農・就職指導の積極的展開

入学から就農・就職に対する意識・意欲を喚起し、希望進路に進めるような指導を行った。

就職状況一覧表

(単位：人)

区分	就農 (自営)	就農 (法人)	研修	進学	協同組合 (農協・生協)	農業団体	学校・教育関係	公務員	青年海外協力隊	農業関係民間企業	病院	社会福祉施設等	栄養関係企業	その他一般企業	その他	合計
アグリビジネス科	4	16	0	1	1	2	2	0	0	1	0	0	0	4	1	32
食品栄養科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	21	1	1	31
研究科	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3

(4) 奨学金育英事業の運営状況

能力や意欲があるにもかかわらず、経済的・金銭的な理由で修学困難な学生を支援するために、学園独自の制度により奨学資金の貸与を行った。

・貸与状況（平成 29 年 3 月 31 日現在）

卒業生 14 名 貸与残高 8,050,000 円

在学生 5 名 貸与残高 4,560,000 円（H29.3 卒業生含む）

(5) 学生寮の運営状況

今年度は男子寮(2棟)で38名、女子寮(2棟)で43名の学生が寮生活を送った。
なお、科別内訳はアグリビジネス科35名、食品栄養科8名であった。

(6) 健康づくりに資する学生食堂の運営

寮生は3食給食、通学生に昼食給食を実施した。栄養管理された食事の提供をして、安全で健康的な食生活を考える食事の大切さや、規則正しい食習慣、食と農を考える環境を整えることで学生食堂を食育の現場にすることに努力した。

4. 社会人など研修事業の充実と拡大

研修においては事業を拡充・強化していくため、通常の研修のほかに子どもの農業体験学習、土曜日に開講する社会人のための農業体験や出前講座などを実施した。

また、茨城県、厚生労働省からの委託事業も実施した。

(1) 研修課・実技研修

研修課は、独自の研修である「チャレンジファームスクール」を中心に独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構からの委託事業である「農業者育成科」、茨城県からの委託事業である「農業実践科」などを実施した。「チャレンジファームスクール」は8人が研修し、1名が新規就農、1名が雇用就農、1名が農業学校に就職、継続1年研修が5名であった。また、「市民講座」として「野菜づくり講座」(常陽藝文センター)も企画し、20名が1年間受講した。その他、国外からも研修を受け入れ、ベトナムからの技能研修生に対する農業機械研修やアセアン研修など東南アジアからの研修生を受け入れた。

実技研修実績

名 称	項 目	人 数 (人)			備 考
		28年度	27年度	26年度	
チャレンジファームスクール	1年コース	7	11	15	
	6ヶ月コース	2	1	0	
新規就農キャリア	就農準備校	0	2	4	月2回/第2・4土曜日
	3ヶ月コース	0	0	0	火・木・金開講
	短期(2~3日研修)	0	0	1	機械研修他
	農業体験	2	2	4	
農業体験学習	幼稚園・小学校・ 中学校・高等学校	1,116	1,230	1,387	田植え、稲刈り サツマイモ植え、収穫

農業実践科	職業訓練委託事業	10	9	7	茨城県 2016/5月～10月
農業者育成科	職業訓練委託事業	18	18	-	厚生労働省 2016/1月～10月
社会人研修	常陽藝文講座	20	24	16	4月～3月 月2回/第2・4土曜日
外国人研修	ベトナム機械研修	45	61	-	外国人技能実習生

(2) 国際研修

国際研修実施事業

名称	委託元	種別	人数	研修期間	主な研修内容
タイ王国タマサート大学 科学技術部との交流事業	タマサート大学 食品科学科	学生	2人	6月～8月	(日本における)栄養管理、調理技術、衛生管理等
アジア農業人材育成事業 基礎研修	国際農業者交流協会	東南アジアの 青年農業者	61人	4/13～ 4/20	日本語研修
アジア農業人材育成事業 学課研修	国際農業者交流協会	東南アジアの 青年農業者	55人	8/17～ 8/27	農業学科研修
外国人技能実習法定講習	水戸農業協同組合	タイ人技能 実習生	17人	9/1～ 9/30	日本語研修及び、日本の法律・法令講習
外国人技能実習法定講習	茨城県農協中央会 エコリー	ベトナム人 技能実習生	18人 27人	9/1 2/28	農業機械研修を実施した。

5. 図書館の運営状況

図書館の年間利用状況は 771 人であり、総貸出数は 199 冊であった。

6. 農場の運営状況

農場は耕種部門(作物・園芸)と畜産部門の2農場体制で、事業計画に基づき運営した。

作物園芸部門においては、NCS アグリサポート株式会社(以下 NCS)及び全国農業協同組合連合会茨城県本部(以下全農茨城)と、担い手農家の育成と就農・就職(農業関係)を支援するため、共同事業契約書に基づき担い手農家育成のための実習支援プロジェクトを試行実施した。NCS が鯉淵学園のほ場 70a を使用してサツマイモ、ネギを作付けた。また、パイプハウスにコマツナ、イチゴを作付けし、教育実習(実践)農場として位置づけし、研修生も実習した。

また、畜産部門においては、外部事業者(以下瑞穂農場)との「大規模牧草地を含む

土地、施設を有効利用した運営方式」として、畜産農場の経営資源を活用した業務提携により、産学連携モデルを構築し、収益改善と畜産事業を担う人材の育成と確保に取り組みを開始した。

① 施設野菜収量（概算）

品 目	延 べ 面 積 (a)	総 収 量 (kg)	収 量 (kg/10a)	27年度総収量 (kg/10a)
キ ュ ウ リ				
4 ～ 7 月	10	2,424	2,424	3,265
1 ～ 3 月	5	2,552	5,104	6,308
ト マ ト				
4 ～ 7 月	10	4,503	4,503	6,104
8 ～ 12 月	2	520	2,600	3,548
1 ～ 3 月	10	173	865	1,130
そ の 他 果 菜 類	4	242	605	1,008
リーフレタス等葉茎菜類	2	126	631	880
	5	600	1,201	1,604

注) トマトには、ミニトマトを含む

リーフレタス等葉茎菜類は、カブラー（ロマネスコ種）、ハネギ、ホレンソウ、ブロッコリーなど
 その他果菜は、ピーマン、オクラ、トウモロコシなど

② 果樹収量

作 目	面 積 (a)	総 収 量 (kg)	収 量 (kg/10a)	27年総収量 (kg)
ナ シ	75	11,052	1,474	10,652
ブ ド ウ	96	6,666	694	3,270

③ 露地野菜収量

作 目	面 積 (a)	総 収 量 (k g)
ナ ス	2.0	715.0
ピ ー マ ン 類	0.5	204.4
キ ュ ウ リ 類	1.0	251.7
ミ ニ ト マ ト	0.5	77.5
ニ ン ジ ン	7.0	793.7
ダ イ コ ン	5.0	1059.6

サツマイモ	10.0	824.0
ジャガイモ	3.0	451.8
ネギ	3.0	1027.0
ブロッコリー	5.0	431.8
葉菜類	6.0	1690.0

④ 有機露地野菜収量

作目	品目	収量 (kg)	27年度収量 (kg)
		売上 (千円)	売上 (千円)
葉菜類	ホウレンソウ、キャベツ、ブロッコリー、ルッコラ等	241	664
		74	252
果菜類	ナス、トマト、キュウリ、カボチャ等	499	866
		202	296
根菜類	ダイコン、ニンジン、カブ、ショウガ等	392	660
		98	151
芋類	ジャガイモ、サトイモ、サツマイモ等	386	351
		116	81
豆類	インゲン、エダマメ等	23	9
		15	11
雑穀	トウモロコシ	6	11
		3	5
その他	ネギ、ニンニク等	85	62
		64	50
合計		1,671	2,623
		573	846

⑤ 水稻 (イネ) 収量

品種	面積 (a)	総収量 (kg)	収量 (kg/10a)	27年度総収量 (kg)
コシヒカリ	308	14,324	465	13,876
ミルククイーン	14	675	482	685
マンゲツモチ	48	1,930	402	1,377

注) 面積 370a に、本科学学生プロジェクト学習用圃場、並びに研修生用圃場を含む。

7. 講師派遣及び委員委嘱の受託状況

(1) 講師派遣

茨城県立農業大学校等の関係教育機関等との講師派遣協定及び茨城県農業協同組合中央会等との関係機関・組織からの要請により、アグリビジネス科・食品栄養科の両科から引き続き講師等を派遣した。

(2) 委員委嘱の受託

茨城県、日本栄養改善学会、全国栄養士養成専門学校協議会、茨城県栄養士会、日本農業技術検定協会、全国農業大学校協議会等の要請に基づくとともに、関係機関との連携を強化するため、委員等の役職委嘱を受託し、必要な対応を行った。

8. 調査及び試験研究

自然科学のテーマに関する共同研究（特別研究指導を含む）「NPO 法人の役割に関する研究～静岡県内 NPO 法人の現地調査を通じて～」、「乳用牛の分娩前のボディコンディションスコアが分娩時ならびに分娩後のパフォーマンスにおよぼす影響」を行った。（添付資料「調査・試験研究」を参照）

IV 収益事業

1. 農産物直売所及びレストラン等の運営状況

(1) 直売所

同窓生・地域生産者との連携、JAとの取引、ブドウ・梨狩り、自家生産品での加工（干し芋・焼き芋）などに取り組んだ。冬季期間（4月・11月～3月）の学園農産物（貯蔵品含む）が課題となっていたが、それぞれの部署で生産・貯蔵したことで、この期間の品不足は解消しつつある。委託地域生産者の農産物は直売所には欠かせないが、地域生産者登録数も若干増加している。POS システムを導入し集計・分析作業が可能となり、そのデータを有効に活用している。使用店内レイアウトの変更・陳列棚の増設などは定期的に変更した。地域生産者の農産物は豊富で仕入農産物はそのサポート的な位置づけとして仕入れている。

平成 28 年度 売上 49,195 千円（前年度 57,974 千円）

客数 42,934 人（前年度 43,603 人）

(2) レストラン

レストランは前年度末で閉店し、28 年 8 月より施設の賃貸を開始した。

(3) 食肉加工

今年度から学園での肉加工を停止し、全ての肉加工品は OEM（職員の出向製造）により製造した。

食肉加工品直売所売上高 671,431 円

(主な肉加工品) 直火式焼豚(モモ肉)、あらびきウインナー、ベーコン、ハム類

(3) 体験事業

一般市民を対象とした体験型農園(1区画10坪)を実施した。

鯉淵ひろびろ農園 契約者 16区画(個人4人、企業1)

2. 不動産の賃貸状況

平成27年度に開始した「不動産の賃貸に関する事業」を継続展開した。

(1) 畜産農場の賃貸

産学連携事業取組の一環として、(有)瑞穂農場へ畜産農場用地122,000㎡の賃貸を実施した。

(2) 園芸農場の賃貸

産学連携事業取組の一環として、JA全農及びNCS(株)へ園芸農場用地7,100㎡の賃貸を実施した。

(3) レストラン事業を停止し、施設を外部に賃貸した。

V 経営管理体制の整備・強化

1. 業務の合理化・効率化と人件費等経費の削減

(1) 業務の合理化・効率化

平成27年度に部門間連携や内部牽制を強化するために改編したグループ制・チーム制の運用充実を図った。

(2) 人件費等経費の削減

職員の増員を抑制し、少数での運用に努め、人件費の圧縮に努めた。

2. 必要な施設の整備と遊休資産の有効活用

(1) 施設の整備

限られた予算の中で、教室のエアコン設置を段階的に進めた。

(2) 遊休資産の活用

学園敷地内山林等について、地域・社会に貢献できるように施設等を賃貸することなどを検討していく。

3. 必要な資金の確保

(1) 農業団体や同窓会会員等への寄付金要請

① 全国農業会議所、都道府県農業団体及び(有)瑞穂農場等から4,912千円の寄付金支援があった。

② 同窓会会員等に学園創立70周年記念募金を働きかけ、当年度1,857千円の募金があり、累計で12,117千円の実績となった。

(2) 行政補助金等の有効活用

行政補助金等の有効活用対策を検討してきたが、結果として就農教育に関する国庫

補助金 4,854 千円のみでの活用となった。

(3) 金融機関からの借入

運転資金として金融機関借入枠取り（70,000 千円）を実施した。

4. 情報管理の高度化と業務効率化

次の事項に取り組んだ。

(1) 月次決算時期の早期化と部門別損益管理の高度化

(2) 限られた予算の中でのパソコン等情報機器及びソフトの更新

(添付資料) 調査・試験研究

調査・試験研究名	名 前	要旨・発表方法
販路開拓に向けた取組	長谷川量平	発表方法：日本食鳥協会 国産鶏肉新需要創出緊急対策事業 報告書
消費者ニーズに応じた国産チキンの規格	長谷川量平	発表方法：日本食鳥協会 国産鶏肉新需要創出緊急対策事業 報告書
大規模経営と連携して新たな人材を養成	長谷川量平	発表方法：デーリーマン 4月号
産地パックなどの鶏肉流通に係る最近の動向	長谷川量平	発表方法：公益社団法人 中央畜産会 畜産コンサル 10月号
トウモロコシ栽培におけるヒ素吸収能の調査	大熊哲仁 発表方法	通常栽培を行ったトウモロコシ子実に対する自然環境に含まれているヒ素の吸収能について調査した。業務連携している環境管理センターとの共同試験で、とりまとめ終了まで結果について開示不可。環境省委託。
土壌条件が異なる水稻栽培におけるカドミウム吸収能の調査	秋葉勝矢 遠藤理史 大熊哲仁 発表方法	全国各所から、条件の異なる土壌を採取し、コンテナ水稻栽培にて、自然環境に含まれているカドミウムの穀実に対する吸収・集積能について調査を行った。業務連携している環境管理センター担当が調査を進め、鯉淵は調査遂行のための指導。 環境省委託試験であり、とりまとめ終了まで結果についての開示不可。
NPO 法人の役割に関する研究 ～静岡県内 NPO 法人の現地調査を通じて～	大石真布 井上洋一	NPO 法人の活動に参加することによる実態調査を通じ、その果たす役割や、活動内容についての研究を行った。 同 NPO 法人は、森林を 1 次産業と限定せず、工芸品などへの加工（2 次産業）、さらにはレクリエーションや学習の場とする 3 次産業と融合

	発表方法	<p>させることで、林業の採算性確保を模索している。</p> <p>地域の産業である林業、および問題でもある森林の保全を老若男女問わず、採算性の改善という共通した問題意識を持つことで柔軟な発想が生まれ、全国からボランティアとして活動への参加を容易にしている。</p> <p>平成28年度関東ブロック農業大学校等実績発表会</p>
乳用牛の分娩前のボディコンディションスコアが分娩時ならびに分娩後のパフォーマンスにおよぼす影響	<p>篠原由美 井原直人 小島敏之</p> <p>発表方法</p>	<p>乳牛の生体情報を、日常的にモニタリングするボディコンディションスコア（BCS）の分娩時・後の変化が、分娩難易度に影響を及ぼすのか、調査を行った。同時に、分娩後の低カルシウム血症対策のため、給餌へのミネラル混合物のトップドレス給与と、通常行う点滴給与との比較を行った。</p> <p>BCSが極端に低くない限り、分娩難易度に与える影響はないと思われるが、3.25～3.5の範囲にあることが望ましいと考えられる。</p> <p>トップドレス給与の方が、点滴給与法よりも、血漿中カルシウム濃度の回復が早く、簡易な周産期疾病予防方法として、今後も継続検討する必要がある。</p> <p>平成28年度関東ブロック農業大学校等実績発表会</p>
シャインマスカットにおける摘粒の手法が房の仕上がりに与える影響	<p>青柳裕哉 佐久間文雄</p> <p>発表方法</p>	<p>シャインマスカットにおける樹冠の拡大が抑制された強勢樹は、果実肥大が劣ると共に、日焼け果の発生が見られ商品価値を低くする。そこで、強勢新梢の摘心位置がそれらに及ぼす影響について調査した。</p> <p>着房位置摘心区で副梢の発生が少なかったことから、葉数の確保ができなかったこと、気象条件から縮果症が発生しなかったことなどから、新梢の摘心位置の違いが、果実の肥大・品質に及ぼす影響について、結論を出すことができなかつたため、次年度以降も継続調査を行う。</p> <p>平成28年度関東ブロック農業大学校等実績発表会</p>

日本農業技術検定過去問題集	小沼和重他 5 名 発表方法	このテキストは、日本農業技術検定 2 級の合格を目指すための学習として回答および詳細な解説を執筆した。 【著書】 (共書) 「日本農業技術検定過去問題集 2 級」 全国農業会議所発行 (29 年 4 月発行)
ベーコンにおける塩漬法の違いと食味の関係	遠藤 裕也	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
飼料イネ (WCS) の生育調査・自家採取種子の利用	小室 剛 假屋 喜弘 秋葉 勝矢	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
「黒毛和種の系統による種雄牛の特徴による地元における今後の活用方法について」	高久 凌太郎 佐藤 利文	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
牛舎の屋根材で変えられる暑さ	高野 真吾 佐藤 利文	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
フレッシュチーズと酸の種類の評価～乳酸菌の代わりにヨーグルトを入れる～	高橋 知果 長谷川 量平	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
牛舎建築の手続きや牛舎と付帯設備の構造について	竹葉 志野 假屋 喜弘	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
アピオスの販売の可能性・糖化について	石村 圭椰 大熊 哲仁	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
食品ロスを減少させるために	小堀 恵 井上 洋一	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
自然農薬剤の効果の比較	清水 和樹 井上 洋一 平澤 朋美	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
キクイモの栽培と販売	鈴木 恵太 大熊 哲仁	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
フェアトレードの歴史と日本のバナナ貿易の取り組み	橋本 直樹 井上 洋一	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
トウガラシ液散布による効果と影響	川上 あゆみ 平澤 朋美	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
トウモロコシの有機栽培におけるアワノメイガ防除法の検討他	小林 龍正	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
ブルーベリーの栽培改善	近藤 翔太 佐久間 文雄	平成 28 年度プロジェクト学習発表会
有機農法で慣行栽培に負けない	花田 嵐翔	平成 28 年度プロジェクト学習発表会

くらい立派な人参を作れるか	平澤朋美	
有機栽培のぼかし肥料と堆肥によるオクラの生育差について	引田啓一郎 平澤朋美	平成28年度プロジェクト学習発表会
干しいも加工	秋山聖登 長谷川量平	平成28年度プロジェクト学習発表会
台木の種類による病害虫発生率と収量の相違	菊池愛美 大熊哲仁	平成28年度プロジェクト学習発表会
農産物直売所の現状と課題	斎田匡平 井上洋一	平成28年度プロジェクト学習発表会
メロンの側枝本数の変更による品質への影響	櫻井友輔 大熊哲仁	平成28年度プロジェクト学習発表会
天敵昆虫として使用できる昆虫について	関根広基 平澤朋美	平成28年度プロジェクト学習発表会
キュウリの追肥による生育の違いについて	高田香里 大熊哲仁	平成28年度プロジェクト学習発表会
インゲンの放任栽培と摘心栽培の収量比較	富田文参亜 平澤朋美	平成28年度プロジェクト学習発表会
接ぎ木苗の栽培他	根岸俊喜 大熊哲仁	平成28年度プロジェクト学習発表会
水稲合鴨農法における栽植密度	古河智博 小川吉雄 秋葉勝矢	平成28年度プロジェクト学習発表会
カボチャの仕立て方による生育調査	増山祐樹 大熊哲仁	平成28年度プロジェクト学習発表会
～土壌の違いによる水稲の生育反応について～	松山歩史 小川吉雄 秋葉勝矢	平成28年度プロジェクト学習発表会
黒毛和牛の三か月までの子牛の哺乳について	金嶺究 佐藤利文	平成28年度プロジェクト学習発表会